

『戦後 70 年 中井英夫と尾崎左永子展』

今年には戦後 70 年。中井英夫の未発表短歌が発見されたこの時期に合わせ、中城ふみ子、寺山修司らを発見した戦後短歌の革新者であり、ミステリーの傑作『虚無への供物』の作者・中井英夫と、『短歌研究』誌上で読解のインタビューを受けた長年の友人である歌人・尾崎左永子の交流を紹介します。

『虚無への供物』は目白にある旧家を舞台とするミステリー。横溝正史の『獄門島』とともに日本を代表する長篇推理小説です。尾崎左永子は巣鴨の生まれで、『虚無への供物』の女探偵・奈々村久生のモデルでもあり、本年、『佐太郎秀歌私見』で第 6 回日本歌人クラブ大賞を受賞しています。尾崎左永子より中井英夫へ送られた書簡など、二人の交流、それぞれの業績にスポットをあてた展示です。

今回の展示に際し、尾崎左永子氏に格段のご配慮をいただき、濤岡寿子氏には「中井英夫と尾崎左永子」をご寄稿いただきました。ここに記して感謝いたします。

プロフィール

中井 英夫(なかい ひでお、本名同、1922 年 9 月 17 日-1993 年 12 月 10 日)短歌編集者、作家、詩人。

田端生まれ。旧制府立高等学校に進み、戦時中は学徒動員で市谷の陸軍参謀本部に勤務、反戦反軍の戦中日記を記し続ける。戦後、東京大学文学部言語学科に復学、吉行淳之介らと第 14 次『新思潮』創刊。1949 年に日本短歌社に入社し『短歌研究』『日本短歌』の編集長をつとめる。その後角川書店に移り、1961 年まで『短歌』編集長。葛原妙子、塚本邦雄・中城ふみ子・寺山修司・春日井建らを見出し育てた。

『虚無への供物』は、前半二章までを第 8 回江戸川乱歩賞に応募。次席に留まったが、後半を完成させて 1964 年に塔晶夫名義で刊行。作者によって「アンチ・ミステリー、反推理小説」と称され、ミステリーの枠をはみ出し、戦後文学の達成としての評価も高い屈指の名作である。夢野久作『ドグラ・マグラ』、小栗虫太郎『黒死館殺人事件』とともに三大奇書に数えられる。1974 年『悪夢の骨牌』により泉鏡花文学賞。小説、エッセイ、日記、短歌論、詩集など、多彩な業績が『中井英夫全集』にまとめられている。今年、エッセイ集『ハネギウスー世の生活と意見』が刊行された。

尾崎左永子(おざき さえこ、本名は尾崎磋瑛子 1927 年 11 月 5 日 -) 歌人・作家



第 6 回日本歌人クラブ大賞受賞式

平成 27 年 5 月 16 日

巣鴨生まれ。東京女子大学国語科卒業。17 歳で歌誌『歩道』に入会し、佐藤佐太郎に師事する。1954 年、第 2 回短歌研究新人賞に入選(特選は寺山修司)。1955 年、第 1 回角川短歌賞最終候補。1957 年、松田さえこ名義で第一歌集『さるびあ街』を上梓。写実を基本とし、戦後に意志的に生きる女性の都市詠として評価された。第 4 回日本歌人クラブ推薦優秀歌集(現在の日本歌人クラブ賞)。

歌人のかたわら放送作家、作詞家としても活動。1965 年、夫のハーバード大研究留学に伴い渡米。帰国後、古典研究のため国文学者・松尾聰に師事。『新訳・源氏物語』(神奈川県文化賞)のほか、古典への造詣をふまえたエッセイ『源氏の恋文』(日本エッセイスト・クラブ賞)『尾崎左永子の古今・新古今集』『神と歌の物語 新訳古事記』などがある。ほかに母・酒巻寿への聞き書き『おてんば歳時記』、先人に取材した『竹久夢二抄』『愛のうた一晶子・啄木・茂吉』『かの子歌の子』など。一時期、歌壇を離れたが、佐太郎との約束を守り復帰。『炎環』『春雪ふたたび』など歌集多数。1999 年『夕霧峠』により迢空賞。主筆として『星座』『星座 α』を主宰。本年『佐太郎秀歌私見』により日本歌人クラブ大賞受賞。

戦後 70 年 中井英夫と尾崎左永子

濤岡寿子

昭和 29 年、30 年の東京を舞台にした中井英夫の『虚無への供物』は、「東西ミステリーベスト 100」（文藝春秋 1985 年版、2012 年版）でいずれも国内ランキング 2 位となった大変人気の高い作品です。池袋駅から目白駅近くに残る戦前の迷路のような古い家並みの中に、物語の主要舞台である氷沼家があります。洞爺丸事故で両親を亡くした氷沼蒼司と紅司の兄弟、従弟の藍司らのもとで起ころうとしている「ザ・ヒヌマ・マダー・ケース」を未然に防ごうと探偵を買って出たのが奈々村久生です。

久生はラジオ・ライターを本職としている駆け出しのシャンソン歌手という設定ですが、彼女のモデルとなったのが、歌人、エッセイストの尾崎左永子です。戦後の自由な空気のもと、戦前の上流女子のたしなみと自立した意思を兼ね備えた魅力的な女性（少しおっちょこちょい）として描かれています。

中井英夫は名伯楽と呼ばれた短歌雑誌の編集者でした。江戸川乱歩賞に応募、最終選考に残った『虚無への供物』を昭和 39 年に刊行し、以後、『とらんぶ譚』シリーズ等の短編小説の名手、エッセイストとして活躍しますが、雑誌「短歌研究」「短歌」の編集者時代には、葛原妙子、塚本邦雄、中城ふみ子、寺山修司、春日井建、浜田到らを世に送り出し、戦後の歌壇に新風を起こしました。尾崎左永子は昭和 29 年、「短歌研究」第 2 回新人賞で入選となり、その後昭和 32 年に『さるびあ街』を上梓します。尾崎左永子は応募時に、作品の差し替えに「短歌研究」の編集部を訪れ中井英夫と会いますが、中井英夫は尾崎左永子の鮮やかな服装に惹かれ、作品を受け取ったといえます。



『虚無への供物』出版を祝う会
中央が挨拶をする尾崎左永子

奈々村久生は場面に合わせたお洒落をして登場しますが、これは中井英夫が、服装についてアドバイスを求め、応じた尾崎左永子の助言によるものです。「五月は着るものがない」という助言が、『虚無への供物』終章 58 節を「五月は喪服の季」と題し、明るい初夏の新緑の時期は着るものがなく、喪服がふさわしい、と久生らに灰色の服を着せて物語の終焉を彩る場面を生み出しました。そして尾崎左永子は「五月は喪服の季節といへり新緑の駅舎出づればまぶしき真昼」（『彩紅帖』平成 2 年）とうたい、時を経ての競演が行われています。色彩に繊細なこだわりを持つ中井英夫は『虚無への供物』には、色にちなんだ名前や五色不動を登場させ、また香りについても『香りへの旅』『香りの時間』等を刊行しています。

こだわりといえば、奈々村久生の名前は、中井英夫が敬愛する久生十蘭からの命名で、また、氷沼を訪れる刑事の名前も久生十蘭の『魔都』の真名古警視と似た真名子という名前をつけています。他の登場人物の名前も、ひ（氷沼）、ふ（藤木田）、み（光田）、よ（吉村）、いつ（伊豆金造）、むう（牟礼田）、な（奈々村）、や（八田）、このつ（鴻巣）、とう（塔晶夫・中井英夫のデビュー時の名前）と言葉遊びをし、言葉遊びが嵩じて『不思議の国のアリス』のお茶会のパロディまで行われます。



中井英夫と寺山修司

植物学者の父と英文学を学んだ母のもと、大正 11 年に田端で生まれた中井英夫は、母親の影響で三歳から日記をつけ、歌を作りました。日記は亡くなるまで書き続けられ、戦中日記『彼方より』、戦後日記三部作『黒鳥館戦後日記』『流薔園変幻』『月蝕領崩壊』にまとめられています。戦争と軍隊を嫌悪した文学青年が「敵地」である参謀本部でつづった『彼方より』と戦後、生活の糧として日本短歌社に就職、生涯の伴侶を見つけるまでの『黒鳥館戦後日記』（正統 2 冊）は、戦後 70 年を機に読まれてほしい作品です。

宮内省官吏の娘として昭和 2 年に巢鴨で生まれた尾崎左永子は、母に連れられ佐藤佐太郎に入門しましたが、無断で新人賞に応募したり、『さるびあ街』のタイトルを自分でつけたため不興を買ったとのこと。尾崎左永子は放送作家の仕事に携わり、昭和 58 年に佐藤佐太郎の「歩道」に帰り、「運河」の創刊に関わるまで短歌からはしばらく離れますが、夫の海外研究留学に伴い渡米。日本語の美しさを再確認し、帰国後古典研究を続けます。『源氏物語』を王朝の雅を現代にも受け継がれている生活の中の文化を通して語り、『源氏の恋文』（日本エッセイストクラブ賞受賞）、『源氏の薫り』にまとめました。『源氏の恋文』では手紙をしたためる紙の材質や色について、レターセット選びに気を遣ういまどきの感覚にも近い書き方がされ、親しみやすく『源氏物語』の世界に誘われます。『源氏の薫り』の執筆の資料探しの過程の縁で、組香、古法の香道の集成である『香道蘭之園』を翻刻するという大変な事業も行っています。中井英夫も『香りへの旅』で薫香の入門編ともいえる紹介をしており、『源氏の薫り』『香道蘭之園』へと読み進め、香りの文化の豊かさを知ることでもできましょう。



尾崎左永子 17 歳
東京女子大学入試写真

尾崎左永子は『恋ごろも』で与謝野鉄幹、晶子ら「明星」から生まれた女流歌人らの小説的評伝を書き、また岡本かの子の評伝『かの子歌の子』を書きました。豪商の娘の岡本かの子と宮内省官吏の娘の尾崎左永子。どちらかという「嫌い」なのに気になる岡本かの子を、自分史と重ね合わせて書き、恵まれた文学環境を背景にした明治から戦後の日本の女性史が鮮やかに浮かび上がります。

明治 29 年生まれの母・酒巻寿から明治・大正の山の手の女性の暮らしを聞き書きした『おてんば歳時記』や、古くから伝えられてきた文化としての心づかいや身だしなみを記した『大人のこころ化粧』は、『源氏物語』の雅の文化に通じる、日本の基本的文化を次の世代に伝える試みであり、過去を学ぶことで今の自分があり、それが後世につながる歴史の流れの中にあるということ『源氏物語』の研究と同様に教えてくれます。



自宅にて（昭和 60 年ころ）

背後の油絵は自作

中井英夫と尾崎左永子はともに戦前の東京の山の手の文化の中で育ちましたが、青年と少女の戦争の経験は重なりつつも異なります。戦争の間に母を亡くし、田端の生家を空襲で失った中井英夫は、昭和 20 年 8 月に腸チフスを発病し、昏睡状態から目が覚めた 9 月には戦争は終わっていました。終戦の過程を知らずにいきなり戦後に放りだされた中井英夫は、偽の戦後と感じ、異境に流された流刑囚という境遇を作品にし続けました。尾崎左永子は戦後 45 年を経て平成 12 年の「八月十五日を語る会」でようやく戦争について語り、第七歌集『星座空間』（平成 13 年）の「八月悲歌」にまとめました。戦争と戦後を語り続けた中井英夫と長い年月が経ってから語ることを得た尾崎左永子。そしてその言葉を受け止めるのは、後年に生きる者の務めでありましょう。

濤岡 寿子（なみおか ひさこ）プロフィール

「都市の相貌——中井英夫『虚無への供物』と東京」で創元推理評論賞を 1994 年に受賞。1995 年には、この賞の選考委員と受賞者を中心にして探偵小説研究会が結成され、以来「本格ミステリ・ベスト 10」、「本格ミステリ・ディケイド」の編著をはじめとする評論活動を行っている。1998 年日本推理作家協会賞受賞作の『本格ミステリの現在』に「宮部みゆき論【語りと灯】」「綾辻行人論【館幻想】」を、探偵小説研究会の評論誌「CRITICA」に「ハネギウス一世との邂逅 本多正一インタビュー」等を発表している。

◇ 中井英夫の描く尾崎左永子

われも黄金の釘ひとつ打つ 中井英夫

- この年代には若い女流の興隆もめざましく、松田さえこ（現・尾崎礎瑛子）、富小路禎子、大西民子、安永蒔子らが新鮮な作品をみせた。（『黒衣の短歌史』1971年）
- 女流ではもう一人、尾崎左永子がいるけれども、これはあまりに古い友人で、私の長編『虚無への供物』にも奈々久生として登場するくらいだから、ちょっとここで歌人として紹介するわけには参らない。（『暗い海辺のイカルスたち』1985年）
- 一方、短歌とのかかわりは自分でも意外に思えるほど深く長く、ことに昭和二十四年から三十年代のはじめまでの編集者時代は、小説を書くことなどまったく忘れたように新しい新人を発掘するのに夢中だった。自分としてはずいぶん迂遠な回り道をしたような気もするが、戦後短歌のためにはそれがよかったのかどうか。葛原妙子、塚本邦雄、中城ふみ子、寺山修司、石川不二子、尾崎左永子、相良宏、そして春日井建、浜田到、村木道彦、あるいは菱川善夫、上田三四二、田谷鋭などの魅力ある新鋭を積極的に歌壇へ押し出したことを思うと、実作はいつさい発表したことはないが「われも黄金の釘ひとつ打つ」たような気がしないでもない。（三一書房版『中井英夫作品集 別巻』自作解説1988年9月）
- 尾崎左永子さんには、服装について全部の面倒みてもらったし、ほかにも、学習院で「巴合戦」というのがあって、相手の肩を叩いて「お駄目」と言うんだって。そんなことも教えてもらった。五月に着るものが何もないということも、彼女から聞いたの。だけど、「五月は喪服の季」というのは、なかなかカッコいい小見出しでしょう（笑）。（「塔晶夫は語る」『中井英夫スペシャル 2』1993年2月）

◇ 尾崎左永子の描く中井英夫

奈々久生のころ 尾崎左永子

Aちゃんこと中井英夫が、物に憑かれたように毎日毎日原稿を書いている、と聞いたのは、Bたんからだっただろうか。あの鋭く細い字をペンで書き進み、一字気に入らないと原稿紙を丸めて放り投げるので、机のまわりは紙反故だらけだという。（略）

「ねえ、きものについてちょっと教えてよ。」とAちゃんから電話が入りはじめたころ、作家中井英夫の確実な歩みを私はたいそう嬉しく思ったが、一方、彼は「なんで僕と一緒に翔ばなかったのさ。」と、写実短歌に足を踏まえたままにいる私を、残念そうに誹謗することがあった。

塔晶夫『虚無への供物』が届いて来たとき、最初に喜んで読んだのは学者である夫の方だった。余談だが、夫は木々高太郎を初代会長とする慶大推理研の現会長をつとめている。

作中唯一の女性奈々久生の名は、彼が尊敬してやまない久生十蘭から採ったのだと思う。但しその久生なるキャラクターは、全くいい気な女の子に描かれていて、「久生のモデル」ときかされて喜んでいた私は、多少がっかりしたものだった。

出版記念会には、高橋義孝先生や三島由紀夫氏の顔もみえて盛んだったが、Aちゃんがしきりに照れていたのが印象的だった。

その来会者名簿に、私は図々しくも「奈々久生」と署名したそうである。私もあのころは、匂やかな若さの中に生きていたのだなと思う。

永い歳月を経て、緑と茶をみごとに着こなすダンディな青年中井英夫も、そして久生を気どった私ももう若くはないが、久生はおかげで作品とともに永遠に若い。これはまさに「虚無への供物」だ、という実感が、私にはある。

（三一書房版『中井英夫作品集 別巻』月報1988年9月）